ドラゴンとかたおしたい。

しもじも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ドラゴンとかたおしたい。

【Ｎコード】
Ｎ９３８６Ｚ

【作者名】
しもじも

【あらすじ】
主人公の名前は倉内沙里（１４）気弱な性格の女子中学生である。
そんな彼女は、気がつけばゲームのような世界にいた。
そして恐ろしいドラゴンに会うのだった。

ドラゴンと会った

1

「どここここ」

広い部屋だった。
足元には美しく輝く床。壁はあるが天井がなく、そのまま青い空が広がっている。
何本もの水晶の柱が天を突くように伸びていた。

そして、そこにひとりの少女が立っている。
黒髪を可愛らしく二つ結びにした、歳は十歳前半ほどの少女だ。

「うわー、えぇー」

現実ではあり得ない、夢かゲームかのような光景に言葉を失い、倉内沙里は思わず目を瞬かせた。

「どうなってるのこれ。夢・・・じゃない。
・・・・・・・え、うそ、天国？　　し、死んじゃっ・・・・・・」

この世のものとは思えない光景に、沙里は混乱する。
そして、もしかしたら死んでしまったのではないかと半泣きのまま、先程まで自分が何処に居て、何をしていたか考えてみた。

・・・・・・・・・・・そう、自分は自室にいた。

中学校から帰宅して部屋に入り、ベットに横になって十分もしない内に眠りに落ちた。
両親は共働きで居なかったし、鍵はしっかりと掛けた。自分に何か出来る人間は居なかったはずだ。
誘拐なんて始めから考えていない。こんな超常の場所に連れて来ることが出来る人なんているはずがない。
ではやっぱり自分は死んでしまっていて、ここは天国なのだと考えた方が納得出来る。

理沙の両の瞳に、じわっと涙が溜まった。
学校の友人、先生、従姉妹、そして両親と会えなくなってしまうかもしれない。いや、きっと会えなくなるだろう、何故なら自分は死んだのだからと、悪い方へ悪い方へと考えが進んで行く。

《ぴこん》

突然沙里の耳に電子音が聞こえた。
驚き、音がした方向、右の空に沙里は目を向ける。

そこには淡く輝く文字が浮かんでいた。

《Ｌｖ．８２：ブラッドドラゴン》

「・・・・・・・・・・ぶらっーー？」

そして突如、空が割れ雷鳴が轟いた。

『くくくくく、よく来たな、我が塔を征し者よ。人の身でここまで来たのは貴様でさん「う、うあぁぁあああ！！・・・・・・・うええええええええん！」・・・・・おい、如何した』

雲を裂き、雷鳴と共に天から現れたのは海外のファンタジー小説に出てくるようなドラゴンだった。
それも空を覆うほどの巨体で、捻じれた角が四本生え、赤黒い鱗を体中に生やしていたものだから、その威圧感といったらなかった。
沙里はあまりの恐怖に号泣し、その場に震えながらへたり込み、頭を抱え、亀のように地面に伏せた。

そのあまりの怯え様に、竜は落胆したとばかりに鼻を鳴らした。
竜は強者を求めてこの塔を建てたのだ。
ここまで来たからには目の前で震える少女も強者たる実力が備わっているのだろうが、力に精神がついていかなければ真の強者とは足り得ない。

久々にこの塔の最上階に辿り着いた強者がいると飛んで来たからこそ、竜の落胆は大きかった。怒りさえ覚えたかもしれない。

その凶悪な双眸が沙里を責める様に見据える。

『ふん、名乗りもせぬ内に臆しおって。
この竜神の塔を踏破したとはとても思えぬ小娘だが、この場に貴様が居ることがその何よりの証拠。
せめて一息で消し飛ばしてくれるわ！』

巨大な竜がそう言い放つと、竜の顎に黒い火炎の球体が出現した。

恐らく途轍もない熱量を秘めているであろうその竜の業火は、どんどん膨張していく。

沙里は、自分が如何なるのか理解した。

「ーーーひっ！！」

『さらばだ！　幼き人の子よ！！』

放たれる竜の業火。

その圧倒的な火力に包まれ、沙里の上半身は消し飛んだ。

沙里は最後の言葉も無かった。

自身も状況を理解しないまま炎に焼かれ、死んだのだ。

棒立ちになっていた沙里の下半身が生々しい音をたてて倒れる。

それを竜は冷めた瞳で見ていた。

かつてこの塔を踏破し、自分に挑んで来た人間達も、初見では大なり小なり恐れ、震えたのだ。

しかし彼らはその恐れを強靭な精神で圧し殺し、闘い、誇り高く死んで行った。

『呆気ない、守護の術も掛けていなかったか。何故あれ如きがこの塔の最上階に・・・・・・』

ここは英雄達の墓場でもある。

そしてこの場に、この愚かな小娘の魂はふさわしくない。

竜が残った下半身を消し飛ばそうとしたーーーそのときだった。

ぎゅる、ぎゅる、ぎゅる、と音を立てて、下半身の断面から肉がせ

りあがってきたのだ。
そしてその肉はやがて人の輪郭を形作っていく。
おぞましい、人間とは思えぬ現象だった。
正常の人が見れば、恐怖に顔を引きつらせながら化け物と叫ぶことだろう。
しかし、この竜は唯でさえ強面どころではない顔を凶悪に歪ませ、笑ったのだ。
驚くことに、歓喜の哄笑だった。

『くっ、くはははは！　そうか、貴様人間の癖に不死者か！
これはいいぞ！　お前こそ我が望んでいた存在だ！』

かつての人間の英雄は、人以外が持ち得ぬ異常な成長性、悪魔的な智謀、限界を超えて戦う精神力を持ってして、自分と対等に闘ってきた。
竜はその、種族の持つ純粋な強さに囚われない強さに惹かれ、好んで人間と闘う様になったのだ。

が、一度重傷を負えば死ぬしかない、成長しきる前に寿命が尽きる、老いるなど致命的な弱さもあった。

しかし、目の前でしきりに瞬きを繰り返している少女は、それがないという。死なぬというのだ。

『よい、よいぞ。まさかこの様な出会いがまだ残されていたとはな。しかし、やはりまだ惰弱。身体が、何より精神が。故に、特別に我が血をくれてやる』

竜は完全に蘇った沙里の口に、己の血を垂らした。
途端に沙里は叫び転がり、悶え始め、そして動かなくなった。

沙里はまた死んだのだった。

『何の事はない、お前は死んでも蘇る。目が覚めた頃には新たな力を得ているであろう。
その力を使いこなせる様になったとき、もう一度我に会いに来い』

沙里の身体は絶えず肉が裂かれ、骨が砕かれを繰り返している。
意識が無くとも生きてさえいれば問題ないとばかりに。

沙里の身体は竜の血によって造りかえられていた。

狼を倒した

2

《ぴろん》

電子音が鳴った。
わたしはゆっくりと意識を覚醒させた。

朝・・・・・・・・・・・・・。

母だろうか、腕を引っ張られている。
何時も一人で起きているから、起こしに来るなんて珍しい。

寝過ごした？
しかし、両親は毎朝わたしが起きるころには家を出ている。では誰が？

けっこう強引に、力強く、生温かく。

生温かく？

「グルルルルル・・・・・・！」

・・・犬？　いや、大きさから推測するに狼だろうか。
黒い狼が、わたしの腕に食らいついている。それにしては痛みがない。ペットは飼ったことがないのでわからないが、甘噛みというや

つだろう。
しかし首は凄い勢いで右左に振ってる。この前ＴＶで観たワニのようだ。獲物の肉を引きちぎるときの。
首を巡らせる。
自分の部屋ではない。森である。
何故自分はこんな所にいるのだろうか。謎だ。
「ガルルル！　グルゥ・・・ガルッ！！」
兎に角、じゃれてくる狼が好い加減うっとおしい。
腕を振り、ぺいっと離してしまう。
狼は、３メートルほど飛んだ後、空中でくるりと宙返り、体制をしっかりと整えてから地面に着地した。
「グルルルッ！」
唸っている。
威嚇しているのか。いや、ジリジリと後ろに下がっている。
警戒しているのか？　唯の女子中学生に？
「ん？　あれは・・・・・・」
先程は半覚醒状態で気がつかなかったが、狼の頭上には光る文字が浮いていた。
《Ｌｖ．５：ワイルドドッグ》

「ワイルドドッグ？　あれ、この文字、そういえば何処かで見たような・・・・・・ああ、あのドラゴンは夢じゃなかったのか」

おかしな場所に気がつけばいて、恐ろしいドラゴンが現れた。こうして生きてここに居るということは死ななかったらしい。

しかしあんな生き物が現実に居る訳がない。
レベルや名前が光の文字になって表示される訳がない。
さしずめここはファンタジーなゲームの世界、ということだろうか。
つまり、ここはわたしの生まれ育った世界ではない。
わたしは今までの人生で手に入れた全てを一瞬にして無くしたのだ。

自分でも驚くほど簡単に、わたしはその事実を受け入れた。
ふふっ、と笑みが漏れる。
恥ずかしい。何であの時のわたしはあんな無様を晒していたのだろうか。
強者に敵わないのはわかる。しかし、ならば力を着けて出直して来ればいいだけであって、つまりは逃避こそが正解。その場で膝を突くなんて以ての外なのだ。
いや、それこそが逃げだ。勝利からの逃げだ。
ならば、どうやってかは知らないが、今無事で此処に居るわたしはまだ負けてはいない。
あの竜に勝る力を身につけ、そしてあの角やら牙やらを全部引き抜いて首輪にし、わたしのペットにしてやればいいのだ。
それは、それはとっても気持ちのいい出来事になるだろう。

この僅かな思考の時間を好機とみたか、狼・・・ワイルドドッグは跳躍し、飛びかかってきた。

が、遅い。

わたしは横っ跳びの後転げ、その勢いのまま立ち上がり中腰で構える。
狼はその間にわたしのいた場所を通り過ぎ、着地、反転していた。
そういえば痛くなかったから放っておいたが、わたしはあの狼に左腕を噛まれていなかっただろうか。
狼をちゃんと見ながら、チラリと視界の端で腕を確認する。
狼の歯形だ。しっかり血も出ている。
縫うまではいかないが、それなりの怪我だ。
気を向けたらじくじくと痛み始めた。
狼の黒い体が深く沈んだ。
「グルァ！」
跳躍。先程の焼き回しだ。
目は完全にその動きを捉えている。
今度は余裕を持たず、腰を更に落として体を一つ分ずらしてみた。
が、これでは駄目。まだ当たる。
そう、その爪だ。
これを前に転がって避けて、頭が上に向いたところで伸ばした足の踵を・・・・・・そこ。柔らかい腹にカウンター。
足に薄い毛と、ぶにゅっとした脂肪の感触。・・・・・・ん？　裸

足である。服も変な・・・まぁいい。

背中と両手でしっかりと地面を掴んで、膝を伸ばす。

「ギャウ！？」

ベキゴキと骨を折る感触。

よし。５メートルは飛んだ。そして確信した。

「あのドラゴン、わたしの体に何をした」

唯の女子中学生であるわたしにこんなこと出来るはずがない。こんなに早く、ついさっきできた左腕の傷が治るはずもない。

身体能力、判断力、頑丈さ、考え方や話し方もおかしくなっている。

そして以前のわたしに狼のモーニングコールを冷静に対処できる度量はない。

でも、どれも不都合なことはない。寧ろ好都合。

身体、精神、戦士として重要なこの二つが大幅に上昇した。何を嘆くことがあろうか。

ちなみに髪の色も赤黒く変色していたが、これはどうでもいい。些事だ。

見やれば、狼は既に虫の息だった。

近寄り、首を踏みつけ、一思いに踏み抜く。

「ーーギャン」

ゴキリと音がして、狼は死んだ。

《ぴろぴろりん》

《倉内沙里のＬｅｖｅｌは上昇した。倉内沙里はＬｖ．２になった》

《倉内沙里はスキル咆哮を覚えた》

電子音、そして目の前に光る文字が現れた。

レベル、スキル、どちらもゲームのよくあるシステムだ。

「本当にテレビゲームの世界のようだな。わたしもよくは知らないが・・・・・・っと、よく、知らないけどね・・・と。

うん、やっぱり話し方まで変えるのはよくないよね。わたしが倉内沙里であることに変わりはないんだし。

性格はもうどうしようもないからね。しょうがないよね」

それよりレベルだ。

これは単純に強くなったと解釈していいだろう。ゲームはしないと言っても、このくらいは知っている。

次にスキル。

これは単純に技能とか、技だろう。

わたしは咆哮というスキルを覚えたらしいのだか、どうやって使えばいいのだろうか。

「咆哮」

とりあえず口に出してみたが、何も起こらなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9386z/

ドラゴンとかたおしたい。

2011年12月29日12時47分発行